東日本大震災の緊急消防援助隊派遣を終えて

【所　属】　　枚方東消防署

【階　級】　　消防司令補

【氏　名】　　松浦　直樹

指令課からの一斉放送による地震発災の一報やテレビ報道から「東北地方や関東地方で大きな地震災害が起こってしまった」と、当初はその程度の認識でしか有りませんでした。

大阪府隊第１次派遣隊 67 隊 265 名の一員として出発し、岩手県遠野市運動公園（野営地）に到着の後、未だ被害程度が把握されていない大槌町へマイクロバスと徒歩で赴き、当隊は支援隊として人的・物的被害調査を開始しました。

被災地は何とも言えない静寂さが漂い、あらゆる物は津波で押し流され、家屋の 2 階部分や港に係留されていた漁船、自動車、瓦礫などが山積していたところもあり、あるいは、何も無くなってしまった平地を表し、液状化現象と津波で堆積した泥の匂いがあたり一面を漂っていました。

私とバディ（※２人１組）を組んで、被害調査に随行していただいた現地の 28 歳の救急隊員の方は、「僕の妻と長女は行方不明で未だ連絡が取れず、津波に飲み込まれて生存の望みは少ないと思います。次女は避難所で見かけたと聞きましたが、確認は出来ていません」と言われました。その言葉に対し、私は彼に励ます言葉の一つも思い浮かびませんでした。家族の安否が不明にもかかわらず、消防の任務を懸命に遂行している彼の背中を見た時、「現地の消防職員・消防団員も被災者なんだ」という事を強く思い知らされ、そんな状況にもかかわらず気丈にも消防業務を遂行する姿に尊敬の念を覚えました。

我々は、この数日間の支援活動が終われば帰る家があり、「お疲れ様」と笑顔で迎えてくれる家族がいます。その日常の当たり前の事がどれほど「幸せなこと」なのか、その幸せを守ることがどんなに大切なのかを教えられました。

復興には、まだまだ長い年月が必要と思われます。支援できる我々が、消防人の一人として、又、国民の一人として、これから被災地の方々に何が出来て、どう行動すれば良いのかを考え、実行すべきであると思います。